



おむつが紡ぐ

内緒の Secret Ensemble

アンサンブル

R-18
NOVEL



作者紹介

◆小林ゆうり

平野さんとタッグは初めてでこのボリュームはなかなかエキサイトしすぎや!

好きの守備範囲広い系です。いろんなの書きます。

FanboxとかDLsiteとかもあるんで、Twitter等からは是非是非!!

三和出版にももっと進出していくつもりやで!

おもつが紡ぐ内緒のアソビ

もくじ

4……中崎たまき

作：小林ゆうり

71……東雲真由子と榛名佳恋

作：平野月子

おもつが紡ぐ内緒のソソソブル



中崎たまき

作:小林ゆうり



おもつが紡ぐ内緒のアソソブル



普通のヘアゴムできゅっとおさげを作る。長くなった栗色の髪にはちょっと幼く見える。中学二年生くらいで止まってしまった私の身体の成長期。頑張れば小学生でもいけそうな子どもっぽい身体と顔つき。まだ大人っぽく成長できると淡い期待は捨てていない。中崎^{なかさき}たまき。高校生になりました。

そして一か月経ったころ、最初のイベントが始まる。それは二泊三日の宿泊研修。お尻を気にしながら、玄関でやっとな慣れてきたローファーを履く。

「じゃあ……行ってくるねお母さん」

「気をつけてね。それと——アレ、持った？」

お母さんが言うアレ、を思い出し恥ずかしくなって耳が熱くなる。

「う、うん……。一応今も……それと予備も多めに、うん大丈夫」

「そう。何か困ったらすぐに先生に言うのよ？ 大丈夫、恥ずかしいことじゃないし、絶対先生も笑ったりしないから」

それはわかっている。わかっているけど……。

初めて高校生という私が生まれた日、あまり乗り気とは言えなかった。

家から結構離れた学校へは電車通学。これがこれから毎日だと思いと少し気が重い。

『もっと近い高校にすればよかったのに』

担任の先生と両親の言葉。

そりゃあ私だって、それができるならそうしなかった。

中学三年生の冬、私は一つの大きな失敗をした。

クラスのみんなからこそそこそと噂されていたことは知っている。

きつとそれは高校生になっても続いていくことだろう。

私はそれに耐えられそうになかった。だから高校は誰もいないところを選んだ、というワケだ。

その大きな失敗は私を、私の人生を大きく狂わせた。

まず一つ目。

小二以来ずつとしていなかったおねしょが頻発した。

隠すワケにもいかず、お母さんに泣きながら報告をした。お母さんは疲れていたからとか、大人になる途中だから身体や心が不安定になっちゃっているだけだから大丈夫、と優しく後処理してくれた。

あの朝、温かいシャワーを浴びた私はそれよりも心がぼわぼわ温かくなったことをしっかり覚えていてる。

それから三日、おねしよが続いてしまった。

さすがに疲れや心が不安定だと言われても続いてしまうと心配になる。

二つ目。

さすがにおむつは、ということでお母さんはショーツの中に入れるパッドを買ってきてくれた。

相当気を遣ってくれていたのだろう、毎日寝る前に二つ、パッケージから出して手渡ししてくれた。きつと袋が部屋にあったら私がそれを気にしてしまうかもしれないからだろう。そのパッドはたまにショーツを汚すことはあっても、布団までを濡らすことがなく、私の心は少し楽になれた。朝、おしっこを吸ったパッドを剥がすときは大きなため息が出してしまうけど。

これで高校生になるまではなんとかなるかな、と思っていた。

実際、おねしよの頻度は少しずつ減っていった。

ショーツの中のパッドも次第に気にならなくなって、そういう自分が普通になりつつあった。

そして、また事件は高校の入学式の後に起こった。

やっぱり高校ともなると、人それぞれの個性というか、『種類』が増えたような気がした。金髪のギャルっぽい人がいて驚いた。中学のときにはこういう人はいなかった。……なんといか少し怖い。榛名^{はるな}さん、というみたいだけどスカートも短いし、私みたいにあんなことで目立ったりなんてせず、明るいとどこにずっといたのかなあ、なんて思ったり。不良……ではない、ただただ明るく快活な、感じのだけど、私とはちよつと違うかなあ、なんて思ったり。

まあ私にはお化粧とかもまだ早い。

そんなはじめてましての人ばかりの環境に疲れてしまった私は、行きは座れなかった電車に座ることができて、ついうとうととしてしまった。

一時間も二時間も乗るワケではなく、せいぜい二十分ほど。寝ちゃまずいと頭を軽く振って目を覚まそうとしたとき、お尻にぐちゅり、蒸したタオルの上にいるような感触があった。

「……っ！」

この感触はここ最近で何度も何度も味わってきたモノ。

—— おねしょ。

だけど幸か不幸か出たのはそこまで量はなくて、ショーツとスカート、それとシートに

五百円玉くらいのシミを作ってしまった程度。

まだ降りる駅じゃなかったのにその電車から逃げるように降りて、トイレへと走った。個室に入つてすぐ、焦るようにショーツを脱いだ。別にそこまでおしっこがしたかったワケじゃないのに。

高校生になったから、と意気込んで買ったばかりのちゆるちゆる生地のおトナなショーツに似合わない、なんとも恥ずかしいシミが広がっていた。

このショーツを人に見られでもしたら間違いなく全員がおもらしをしてしまったモノだと判断するだろう。

せめて下着だけはおトナでありたいと思った矢先のこと。私にとってちょっと電車であろうとしてのおしっこおねしょはとてもダメージの大きいモノとなった。

この日から私は昼もショーツにおねしょパッドを入れて行くことにした。うとうとしてしまっただけでおしっこが出てしまうなんて、怖すぎる。

おトナのショーツには、子ども用のおねしょパッドはうまくつけることができなかつた。ズレるしはみだすしで。

ならそれに合うモノを、と思ってもいつものとは違うということが、どこか不安になってくる。

結局、私は安心感を選んでしまった。

ふわふわの綿でお尻もすっぽり。おねしょパッドをつけてもぴったりフィット。そんな前までの子どもっぽいやシヨーツに逆戻りしてしまった。

オトナなシヨーツはたった一日だけ。おしっこで濡らして汚して、それで終わらせてしまった。

私の身体にも、おしもにも一番似合ってしまう子どもぽんつにおねしょパッド。なんと恥ずかしいことか。

それから一か月、新たな高校生活にも、パッドの入ったシヨーツで過ごす時間も慣れてきた。

「今週は水曜日から、宿泊研修です。今日配ったしおりを見て、各自で準備をしておくように」

担任の東雲先生しのめ。キリっとした人で眼鏡の似合うオトナな女性という感じた。私みたいになっちゃうくてぼわっとした感じだとあはなれそうにない。

きつと普段からピシっとした生活でバシッとカッコいい感じなんだろうなあ。

宿泊研修。そういえば学校説明会するときにもそんなことを言っていた気がする。高校生活に慣れたら次はクラスメイトたちともっと交流を図ろうと。

(宿泊……お泊まり……おねしょ……)

大きな不安の塊に身体が縛られる。

高校生になって一か月、おねしょをしない日はなかった。それどころか、量まで増えてパッドから少し漏れてショーツやパジャマを汚してしまうことも多々あった。

そんな私が見んなどお泊まりなんてできるワケがない。

お母さんからはショーツを汚す日が続くならおむつも、と言われてしまっていた。汚してしまった日の朝はブルーを越えてダークになっていることは自覚している。安心感があるに越したことはない。

(おむつ……したら、お泊まりも楽しめるのかな)

〳〳一日目〳〳

そしてその日はやってきた。

お母さんは、私にジュニア用のおむつを買ってきてくれていた。一度試着で穿いただけ

で、まだ使ってははいない。

移動はほとんどバス。もしうとうとしてしまうと、考えたらやっぱり怖い。おむつかパッドかと考えているだけで心配になってあまりしっっかり眠れなかった。

「うわ……」

それでもおねしょはしっかりしてしまった。パッドから溢れて、少しサイズの大きめのジュニアショーツもぐしゅつと濡らし、パジャマも濡らし、久しぶりにお布団まで小さくないシミを作ってしまった。

（これだけおねしょしちゃったら、バレないなんて絶対無理……っ！）

朝ご飯を作っていたお母さんに正直にお布団まで汚したことを話し、頭を撫でてもらってからシャワーを浴びた。

「……」

脱衣所に行き行って、制服と下着。

ブラはいつものジュニア用。高校生らしい大人用は今の私には少し似合わない。

カラフルな柄の入った紙おむつ。いくらジュニア用だと言われても、書いていても、やっぱり高校生になってこれはどうしても抵抗感がある。

だけど、万が一が起こってしまうと高校生活が一日で終わりになってしまうかもしれないな

いから。

「……変な感じ」

普通にショーツを穿くように、紙っぽいけどさらさらふわふわ。穿いた感触はおねしょパッドとはまたちよつと違う感じがして、なんだか落ち着かない。

やっぱりイヤだな、と思ってそれを下そうとしたけど、手が止まった。

万が一の失敗も許されない。

バスの行き帰りだけじゃない。二泊もしないといけない。そうなれば最低でも四回は可能性が出てくる。

それをパッドだけで抑え込めるだろうか？

「否」

ちゃんとおむつを五枚、そしてパッドも同じくらいカバンに入れた。ただでさえ重い荷物が紙のような材質なものにもっと重くなってしまったようにも感じてしまう。

「じゃあ、行ってきます」

なんだかんだ、家を出るまでやたらと時間がかかってしまった気がするけど、ようやく家を出て、宿泊研修は始まった。

「はあ……」

重い。カバンもだけど、身体も心も。

歩いていてもお尻が気になってしまう。パッドを入れたショーツには慣れたけど、おむつとなるだけでここまでお尻の違和感が増えてしまうのか、と感じてしまう。

「全員揃ったので、出発します」

ああ、ついに始まってしまう。

バスの時間は眠れば一瞬だろうけど、眠ればどうなってしまいか。

おむつは穿いているけど、なんだかもこするし、座っていてもお尻が気になってしまふ。

なんだか座り心地の悪いクッションに座っているみたい。これも自然と慣れてくるのだろうか。

「じゃあ、私寝るっすから」

横の子はバスが動き出した瞬間にはもう眠ってしまった。そういえばあまり話したことのない子だけど、こう、言い方は悪いかもしれないがこういうお気楽な自分になれたら、なんとなくだけおねしょも完全に治ってしまいうような気がする。

じゃあ私もおねしょのことなんてどうせおむつをしているからと気にせず、いっそ寝て

しまった方が、と思っても寝付けず、ゆっくりと車窓からの風景を眺めながらコーヒーを飲んでいた。

(うう……)

どうして私はコーヒーなんて飲んじやったのだろうか。眠くなりたくないからとはいえ、起きているときにおしっこがしたくなることなんて簡単に予想できたことだっただろうに。

(おしっこしたくなってきちゃった……)

こうなるのは当然のこと。片道二時間ほどと言っていたけど、まだ時計は三十分ほどくらいしか進んでいない。

ということは後九十分はこのバスから動けないということ。

「すー……っすー」

横の子はすやすやと穏やかに眠っている。

ちよつと身体を揺する程度では間違いないだろうと思えるくらいぐっすりすやすや。

(その方がいいけど、さ)

ちよつともじもじとするくらいでは多分バレない。そう思うと少し安心するような。

(だからって)

それ自体が何か好転した、というワケではない。

おしっこは行きたいし、ぐんぐん溜まっていつている感じがとてもイヤなアレだ。

(おしっこしたい……)

一度このモードに入ると尿意はみるみる大きくなっていく。

——それはもう、忘れたい記憶の奥底にあったモノがまた、引っ張り出される。

あのとときみたいなことなんてもう——

去年の冬休みに入る直前のこと。

私は授業中におしっこを漏らしてしまった。その前は体育の授業で、ずっとそのときからずっとガマンしていて、体操服から制服に着替えることに手間取って、そのまま数学の授業で手を挙げることもできないまま限界を迎えてしまった。

ショーツの中が一気に温かくなって、脚もお尻もシャワーをかけられているみたいだった。

その瞬間だけは解放感と温かさで少し気持ち良かったことは覚えている。だけど、誰かが言った『おもらし』という言葉で私の何が壊れてしまった。

思い出したくもない、イヤな事件だった。

だから、私はちゃんとガマンしないとイケない。穿いているおむつは保険。使っている、おもらしをしていい、というモノではない。

「……っ！」

だからと言ってじゃあ降りるまでガマンできるか、といえはもう首を横に振ってしまうくらいにまでなっていた。

その証拠にさほど寒いと感じなかったのに、緩めについていたバスの空調が妙に寒く感じるし、それと似ているようで少し違う身体の震え。

高鳴る胸の鼓動。おへその下辺りがじくじくと痛い。

バスが揺れるたびに、漏れそうになるおしっこ。

普通にガマンするより、もつともつとおしっこを意識してしまって、よりおしっこが早くしたくなってしまおう。

「……あ、それなら早くしちゃうっす……」

横から小さな声。私は車窓から流れる高速道路を眺めながら身体が固まる。

(もしかして、起きちゃった？ もじもじしてたのバレちゃった？ おしっこしたいのバレちゃった？)

※続きは完全版でお楽しみください。



東雲真由子と榛名佳恋

作：平野月子



おもつが紡ぐ内緒のアソソブル

1. 学校にて side 東雲真由子 しのめまゆこ

「榛名さん、スカート丈が短すぎます。校則違反ですよ！」

終業のチャイムが鳴ったばかりの廊下は、帰宅する生徒と部活動に向かう生徒で賑わっている。放課後になり、生徒たちは廊下の各所でおしゃべりの華を咲かせていた。二週間ほど前に入学してきたばかりの一年生のフロアは、女子特有の人懐っこさの中にまだぎこちなさが混在していて、初々しきを感じる。

その中に、金髪のロングヘアをした女子生徒を見つけると、私は声を掛けた。

私の声に、友達とおしゃべりをしていた彼女――

はるなかれん 榛名佳恋が振り返る。色白の肌。

卵型の小さな顔に、長い睫毛に縁取られた大きな目と、すっきりとした鼻筋。唇にはカラーリップを塗っているようで、ほんのりとピンクに色づいていた。

まるで人形みたいな美少女だけど、人懐っこい性格をしていて誰とでもすぐに打ち解けられる。そんな彼女は、きつとこれからクラスを中心人物になっていくだろう。

制服のスカートは膝丈で着用すべきだと校則で定められている。だけど、彼女のスカートは、膝上二十センチまで上げられていた。そこからスラリと伸びた色白の綺麗な脚に視線が奪われる。そして、短いスカートの中に隠されているのは――

気が付けば、彼女のスカートを凝視してしまっていることに気付いて、私は慌てて目を

逸らした。

「まゆちゃん、そんな固いこと言わないでよー。イマドキ女子のスカートはこのくらいの長さのほうが、絶対に可愛いんだから！」

私より少し背の低い彼女が、下から覗き込んで唇を尖らせた。そんな表情も可愛いと思ってしまう。ダメダメ、ここは学校なんだから。

「東雲先生と呼びなさい！」
しのめ

私はわざと厳しい声を出して言った。こういうのは最初が肝心だ。最初にピシッと線引きをしておかないと、生徒に舐められてしまう。

「えー！ 先生みたいにカタイこと言わないでよー！」

「私は先生です！」

「仕方ないなあ……じゃあ、まゆちゃん先生ってことで」

「ダメです」

そんなやり取りをしていたら、遠くから彼女を呼ぶ声が聞こえた。

「あ!! 呼ばれてる!! んじゃ、またねーっ！」

ヒラリと身を翻したスカートの裾が捲れて、私はハッと息を飲んだ。

（——見える!!）

そう身構えたけれど、スカートの裾から覗いたのは黒のオーバーショーツだった。去っ

ていく背中を見送りながら、私は身体に入った力を抜いた。

今、走り去っていった彼女は今年の新入生で、私が今年担任するクラスの生徒だ。

人懐っこい彼女と居ると、どうもペースを乱されて調子が崩れてしまう。きつと、素直で表裏のない性格が、一緒にいる人間にも伝わるのだろう。肩肘を張っている力が抜けるというか、なんというか……案外、それはクライじゃない。ただ、学校でそうされるのは、ちよつと困る。

私は生徒たちには、怖くて厳しい先生だと思われているようだけど、そのくらいでちよつとよい。それに、特定の生徒だけ鼻肩するような言動は良くない。

職員室に戻って、腕に抱えていた教材を机に置く。この後、しばらくしたら職員会議だ。今日の議題は月末にある二泊三日の宿泊研修について。一年生は、毎年四月下旬、交流を兼ねた研修旅行をすることになっている。勿論、私も担任として参加する。

それが終わったら、部活の様子も見に行つて……この後のスケジュールを頭の中で確認する。今日も家に帰るのが遅くなりそうだ、と溜息を吐いてイスに座った。

その時、お尻にぐじゅつと濡れた感覚があつて、慌てて立ち上がる。

おしっこをたつぷり吸つたおむつに体重を乗せると、吸収帯に吸い込まれた水分が押し出されてしまうかもしれない。だけど、立っていると、おしっこの重みでおむつがずり落

ちてきそうだ。立つも地獄、座るも地獄……

どうにもならないこの状況に、私はまた大きな溜息を吐いた。

この女子高は県内有数の進学校。私はそこで、数学の教師をしている。就職して三年目で、初めてクラス担任を受け持つことになった。仕事は増えたけれど、生徒たちはみんな可愛いから頑張れる。

それから、私生活でもひとつ、大きく変わったことがあった。それは、私に初めての恋人ができたということ。

だけど、その恋人は私におむつを履かせたがる。なんでかはわからない。

付き合い始めたばかりの頃、恋人は私の部屋に大きなおむつのパッケージを持ってきた。「どうしたの？」と訊ねたら、笑顔で「これから、毎日これを履こうね」と言われてしまった。なんでおむつを？ そう訊ねたけれど、返事はもらえなかった。

赤ちゃんでも病気でもないのに、おむつを履いて生活するというのはなんだか恥ずかしくかった。だから、「ずっとおむつを履いていて」というお願いには頷いてみたものの、実際は恋人と会うときだけおむつを履いて過ごした。

でも、それはすぐにバレてしまって、私のショーツは全て恋人に処分されてしまった。それから私は何度か下着を買ったけれど、何故かすぐにショーツは見つかって捨てられて

しまう。そのたびに、私の恋人は不機嫌になる。だから、もうショーツを履くことは諦めた。私がおむつを履いてさえいれば、恋人はご機嫌なのだから。

だから、私は毎日、学校に紙おむつを履いて出勤する。

最近のおむつは薄型で、つけていてもあまり違和感はない。パンツタイプのおむつはトイレに行くことにも不自由しない。そう考えれば、ショーツを履いているのときほど違いはない気がした。いや、私がそう思ったかったのだ。ショーツもおむつもそんなに変わらないって。

そして、毎日おむつをつけているうちに、いつの間にかおむつ生活にもすっかり慣れてしまった。私はおむつを履いていても尿意を催したときにはトイレに行っていたし、オリモノとか生理の時に下着を汚す心配をしなくて良いのは少し便利かもしれないなんてすら思い始めていたのだ。

(だけど……)

私は、午後の出来事を思い出した。

今日は昼休みに生徒指導が入っていて、午後も立て続けに授業があった。しかも、授業と授業の間の休み時間には、生徒の質問対応もしてしまったため、トイレに行く時間がどうしても取れなかったのだ。

最後の授業を乗り越えればトイレに行ける。大丈夫。きっと我慢できる。

そう思って授業に挑んだのだけど、時間が経つにつれてお股がウズウズしてくる。

早く授業を終わらせて、トイレに行きたい。そう思うけれど、どんなに私の気が急いいても時間の流れる早さは変わらなかった。教室では、生徒たちが私の解説に耳を傾けて、真剣にノートを取っている。教科書の解説に熱中すれば、少しは気もまぎれるのだけど、ふとした瞬間、おしっこをした気持ちは顔を出す。

いつそのこと、授業を中断して今すぐトイレに駆け込んでしまおうかとも思った。でも、その考えはすぐに打ち消す。だって、授業中に教師がトイレに行くために教室から出ていくなんて、有り得ない。それに、今トイレになんて行ってしまったら、今日の授業が中途半端なところで終わってしまう。だから、授業が終わるまで我慢しなきゃ……

そう自分に言い聞かせてなんとか尿意を耐えていたのだけど、おしっこはお腹の下の方にどんどん溜まって行って、出ていこうとする。

そして、授業終了まであと十分、というところで事件は起こった。

授業の最後に、今日学習した内容の問題演習をする。それで、生徒に解くべき問題番号を伝えた直後、私の尿意はついに限界を超えてしまったのだ。

(もう我慢できない……!!)

「ふっ……あぁ……」

息を詰めても、何の効果もなかった。

しゃわわわわわ……

限界まで我慢したおしっこは、一度決壊すると止まらない。

教卓の端をぎゅつと掴んで、全身に力を入れてなんとかおしっこを押しとどめようとしたけれど、こうなってしまうと、もう私の意思ではどうにもならなかった。

せめて声を漏らさないようにと、きつく唇を結ぶ。だけど、お股のまわりに温かい感覚がどンドン広がっていく。私のお腹にたっぷり溜まったおしっこは、長い時間を掛けて私の身体の外へと出て行ったのだった。

(生徒の前でお漏らしをしてしまった……)

全部出し切った後、私は俯いたまま唇を噛んだ。お腹はスッキリしたけれど、おむつはびしゃびしゃだ。そのどうしようもない状態に、しばらくそのまま動けずに居たけれど、今は授業中だ。こんなことで授業を放棄するなんて、教師として許されることじゃない。

意を決して恐る恐る顔を上げてみる。真面目な生徒たちは真剣に問題演習に取り組んでいたようで、私に注目している生徒は居なかった。いや、居なかったと思いたい。それで、少しかだけホツとした。大丈夫、誰にもバレていない。

私は今日もおむつを履いていたから、おしっこは全ておむつが吸い取ってくれたはずだ。

おかげで、お股のあたりのおむつが、なんだかもったりしている。

教科書を確認するフリをして、自分の足元を見てみたけれど、やはりおむつはちゃんと仕事をしてくれていたようだ。そのことに安堵する。

最近の紙おむつは優秀だ。私が履いているのは薄型おむつだったのに、朝から溜め込んだ尿を一滴も零さずに吸収してくれた。おかげで、生徒の前であられもない醜態を晒すという最悪の事態は免れた。それでも、授業中、生徒の前でおしっこをってしまったという事実は消えない。

(授業は残り五分。解説をしなきゃ……)

演習時間が終了したことを生徒たちに告げて、私は板書をしながら解説を始める。

黒板に式を書くために生徒たちに背中を向けたとき、おしっこで膨らんだおむつのシルエツトがスカートに透けてしまっていたらどうしようと思っただキドキした。だけど、真面目な生徒たちは勿論、私のお尻なんて気にせず、解説に耳を傾けて熱心に板書をノートに写していた。

背徳感と羞恥心を胸に抱えながらした解説は、いつもよりも随分早口になってしまったかもしれない。

なんとか授業を終えたけれど、普段からおむつにおしっこをする習慣なんてない私は、

勿論、着替えのおむつなんて学校に持っていかない。それで、濡れたおむつを履いたまま放課後の業務をする羽目になってしまった。

そんなとき、スカートを短くしている彼女を見つけて思わず声を掛けてしまったのだ。本当は、スカートが捲れるとマズいのは、彼女よりもわたしの方なのに……

(ああ、早く帰りたい)

おしっこをたっぷり吸った部分を押し潰してしまわないように気を付けながら、今度は、ゆっくりと席に座る。濡れたおむつがお股にくっついてきて、気持ち悪さにお尻をモゾモゾと動かしてしまう。そのたびに、股のところがむにゅつとする。

おむつのが気になって、職員会議も上の空だった私は、部活に顔を出したら早々に帰宅することにした。今日やらなければならぬ仕事は全然終わっていなかったけれど、一部は持ち帰って、明日、早めに出勤して片付けようと思った。



濡れたおむつを脱いでしまおうかと、何度も悩んだ。だけど、校内には捨てる場所がない。生徒が使うトイレに使用済みのおむつを残すだなんて言語道断だし、職員室の近くにあり職員用のトイレは生徒は使わないから、私がおむつをしているって他の教師にバレてし

もう可能性が高くなる。

もし捨てたのが私だとバレなくても、職員用のトイレに授業中にお漏らしをした痕跡を残すのが引けた。いや、お漏らししたのが授業中かどうかなんて、濡れたおむつを見ただけで分かるものではないけれど。でも、私が就業時間中にお漏らししてしまったことは変わらない。

それに、おむつを脱いでもしまつたら、その後に履くものがない。勤務中にノーパンで過ごすなんて変態じみたこと、教師がしていいわけがない。

それで結局、私は濡れたおむつを履いたまま、家まで帰った。

おむつが気になり過ぎて、今日はずっと変に緊張していた。しかも、座るとおしりがムニムニユしてしまうので、職員会議の後はできるだけ立っただけのまま仕事をした。おかげで、いつもより早く帰ってきた割には、酷く疲れた気がする。

一人暮らしをしているマンシオンは、駅から徒歩十分。エレベーターに乗って、自分の部屋の前まで戻ってくると、ようやく肩から力を抜くことができた。

「まゆちゃん、おっそーい」

玄関のドアを開けてリビングに入ったら、制服姿の佳恋かれんちゃんがテレビを見ながらソファでくつろいでいた。きつと、渡してある合鍵で入っていたのだろう。

ソファの前にあるローテーブルにはノートと数学の教科書が乗っているの、宿題をしていたようだ。最後まで解き終わっていないから、途中で投げ出してしまったみたいだけど……

「これでも今日は早かったのよ」

いつも通り部活の後にも仕事をしていたら、帰宅はもう何時間かは遅くなっていたはずだ。だけど、今日はおむつを早く替えたくて、急いで帰ってきたから……

「ねえ。学校でバレるようなことするのはやめて」

「何が？」

「佳恋ちゃんと私が付き合ってるってこと！」

私は学校の廊下でのやり取りを思い出して言っただけれど、首を傾げた佳恋ちゃんに悪びれた様子はない。

あの距離感佳恋ちゃんにとっては普通かもしれないけれど、私からすれば近すぎる。教師が生徒と交際しているなんてバレたら、本当に洒落しのめにならない。

「まゆちゃんが気にし過ぎなだけだつて！ それに、東雲先生なんて呼びにくいじゃん！」

「それでも！ 学校に居るときはちゃんとしなさい！」

「はぁーい」

佳恋ちゃんは、唇を尖らせて渋々といった様子で返事をした。

(……まったく、そんな様子も可愛いから困る)

つつい素っ気ない態度を取ってしまうけれど、私は佳恋ちゃんのことは、世界で一番可愛いと思ってるし、世界で一番大好きなのだ。

佳恋ちゃんは、一番上の姉の子供……つまり、私にとっては姪になる。

一昨年のお正月、実家に帰省したときに、姉から「佳恋が数学の勉強が苦手で、どうにかならないかしら」という相談を受けた。

姉は比較的近所に住んでいたので「受験が終わるまでなら」という約束で、私は家庭教師を引き受けた。佳恋ちゃんが中学二年生の冬のことだった。

そのとき、佳恋ちゃんから「第一志望校に合格したらなんでもお願いを聞いて欲しい」とお願いされた。その時は、なにか買ってほしいものもあるのかなって思っていたのだけど……

まさか、佳恋ちゃんの第一志望校が私の勤務先の女子高で、お願いごとが「恋人になって欲しい」だったなんて。

佳恋ちゃんのこと、赤ちゃんの時から知っている。佳恋ちゃんが生まれたとき、私は九歳。姉は佳恋ちゃんが小さい頃は頻繁に実家に帰ってきていたので、そのたびに私は熱心にお世話をした。おむつだって替えてあげたこともある。

そのときから、私にとって、佳恋ちゃんは宝物のように可愛くて愛しい存在だった。佳恋ちゃんも、会うといつも私にべったりとくっついてきて、可愛いなっと思ってた。

「だけど、まさか、佳恋ちゃんが私にそんな感情を持っていたなんて……」

「ねえねえ、ところで……してあげよっか？」

いつの間にかソファから立ち上がった佳恋ちゃんが、私にぴったりとくっついていた。不意に近づかれて、ドキッとすする。

「な、なにをよ？」

「おむつ交換」

とぼけてみせたけど、佳恋ちゃんの手はしっかりと私のお尻を触っている。

「朝からずーっとつけっぱなしでしょ？ 今日はお漏らし何回したの？」

「お、お漏らしなんて……!!」

「でも、まゆちゃんのおしっこの匂い、漏れてるよ？」

佳恋ちゃんが身体をかがめて、クンクンと私のお尻の匂いを嗅いだ。

「え、嘘!？」

その言葉に、血の気が引く。

※続きは完全版でお楽しみください。



作者紹介



◆平野月子

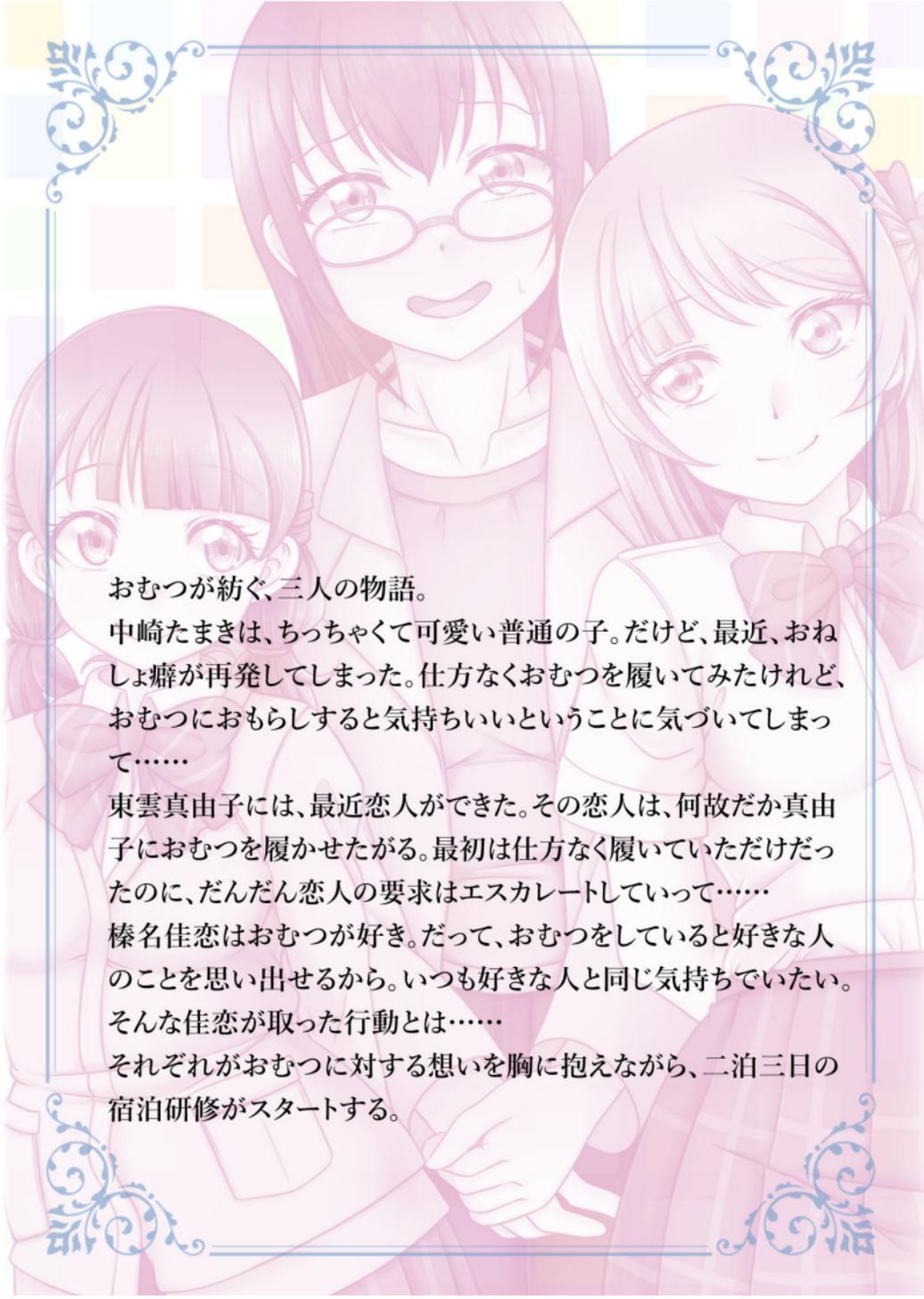
おむつ小説を書き始めて10年目になりました!!

『おむつ倶楽部』(三和出版)で「僕が彼女のオムツになってしまった事件簿。」という連載小説を書かせていただいています。

年明けのイベントでゆーりさんとお会いしたときに、「こんな小説書いたら面白そう!!」とハイテンションで打ち合わせしたのですが、それがこんなに素敵な本になっちゃって、すごく嬉しいです!!

楽しんでいただけますように。





おむつが紡ぐ、三人の物語。

中崎たまきは、ちっちゃくて可愛い普通の子。だけど、最近、おねしょ癖が再発してしまった。仕方なくおむつを履いてみたけれど、おむつにおもらしすると気持ちいいということに気づいてしまって……

東雲真由子には、最近恋人ができた。その恋人は、何故だか真由子におむつを履かせたがる。最初は仕方なく履いていただけだったのに、だんだん恋人の要求はエスカレートして……

榛名佳恋はおむつが好き。だって、おむつをしていると好きな人のことを思い出せるから。いつも好きな人と同じ気持ちでいたい。そんな佳恋が取った行動とは……

それぞれがおむつに対する想いを胸に抱えながら、二泊三日の宿泊研修がスタートする。